

2018年度 日本医学哲学・倫理学会 公開講座
障害のなかで生きること
～「障害があることは不幸」なのか～ 報告

後遺障害者？として 考えていること

土屋 貴志
(大阪市立大学)

※予稿集から修正した部分は緑字で示します

19/02/16

一番言いたいこと

- 生きていることは「ただ生きている」こと以外の何ものでもない
- 幸福も不幸も、希望も絶望も、良いことも嫌なことも、生きることの価値も意義も、死んだほうがましなくらい苦しいことも、生きていなければ存在しない
- したがって、これらのどれも、生きていること自体をやめる理由や、生き続ける理由には、なり得ない
- これらと生きていること自体とを天秤にかける思考こそ、大きな間違い

「健康なことは幸せ」なのか？

- 「障害があることは不幸」 → 「障害がないこと（＝健康なこと）は幸せ」
 - 「健康なことは幸せ」「障害がなくてよかった」と言いたいだけなのでは？
- だが、本当に「健康なことは幸せ」か？
 - 健康なだけで幸せなわけではない（健康だが不幸な人はたくさんいる）
 - 障害があれば幸せになれないわけでもない（障害があるが幸せな人もたくさんいる）

健康はどうやって意識されるか

- WHO憲章(1946)「健康とは、単に病気や虚弱でないということではなく、身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態」
- だが「完全に良好な状態」は定めようがない
- 健康であることは、そのままでは意識されない。病気になったり障害をもったりして初めて「健康でない」ことが意識される
- つまり健康とは、やはり「健康でない（病気だ、障害がある）わけではない」ということ、「病気や障害が全然ない」ということにすぎない

1. 自分のこと

1961年生まれ

1990年3月 慶応義塾大学大学院文学研究科哲学
専攻（倫理学分野）博士課程単位取得退学

1989年4月～1994年3月 杉野女子大学・横浜国
立大学・千葉大学などで非常勤講師

1994年4月より 大阪市立大学文学部教員
（現在准教授。哲学教室所属、倫理学担当）

人権問題研究センター兼任研究員

医学部・都市経営研究科・看護学研究科兼任

専門：倫理学、医療倫理学、人権論、道德教育論

2016年春～夏、初めての長期入院

- 4月2日(土) 自転車で帰宅中、左に傾くのでおかしいと思い、当番病院を紹介してもらおうと消防に電話したら「救急車を出したほうがいい」と言われ、承諾し、脳外科病院に搬送され、そのまま入院
- 4月3日(日) 回復室から個室に移る
- 4月22日(金) 胃ろう（PEG）造設術
- 4月28日(木) 回復期リハビリテーション病棟に移る（個室）
- 6月初め 経口摂取可能に。週に1回程度一時帰宅始める

左側椎骨動脈解離による延髄梗塞

→「ワレンベルク（延髄外側）症候群」★現存の症状

★平衡感覚喪失（左半身が重く、左に傾く）←左半身の運動失調（右半身の半分しか力が出ない）および筋肉の凝り

- 嚥下障害（飲み込めない→胃瘻造設→2か月で消失→抜去）
- しゃっくり（数日間続くことも→1か月ほどで消失）
- めまい、頭が重い（現在は消失）
- 嚔声（声がかすれる→現在はかなり克服）

★左手の痺れ、左顔面の痺れと痛み、左眼奥の痛み、右半身の痛覚と温度感覚の喪失（→現在はむずむず感）、右脚の痺れ

★複視（物がダブって見える）、左目のかすみ（退院後にはヘルペスによる？左眼角膜潰瘍に。現在は潰瘍は治癒するが、角膜の変形によりぼやける）。目を使うと症状が重くなる

2016年春～夏、初めての長期入院

- 6月23日(木) 朝昼夕 3食経口食に
- 6月24日(金) 3食通常食に。胃ろうからの注入なくなる
- 7月11日(月) 胃ろうチューブ抜去
- 7月中旬 右半身の痛覚と温度感覚が少し戻る（くすぐったい感覚、むずむず感）
- 7月29日(金) 退院
左半身の重み、左手と左顔面の痺れ、複視などは変わらず
- 8月1日(月) 復職

できなくなかったこと

- スポーツ（自転車乗りを含む）：左半身の力が出ずバランスが悪い、目が見えにくい（声による指導は可能）
- 日曜大工、庭の手入れ：身体がしんどい
- 観光、ショッピング：身体がしんどいので楽しむ余裕がない
- 自動車の運転：周囲に留意するのがひどく疲れる。途中で休めない
- 映画鑑賞（たぶん）：めまぐるしく動く画面や大音響に耐えられない
- 恋愛（たぶん）：身体がしんどくて異性に関心を抱く余裕がほとんどない（加齢による性欲減退のせいも？）

体を支える労力の割合

- 起きているときの労力の8割くらい以上を、体を支えるために使っている
- だが、人と話したり、議論をしたり、授業をしたり、本を読んだり、ものを書いたり、サッカー指導をしたりして、心が高揚すると、残りの2割以下の部分が拡張し、体を支える労力の割合は相対的に下がる

(フランクルの「自己超越」?)

申し立てと乗り越えの葛藤

- しんどいが、しんどいことを意識していない間は、一時的に解放されている
- しんどさばかり意識していると、しんどさを乗り越えて前へ進むことができない
- でも、しんどさは、申し立てなければ、他者には理解してもらえない
- 申し立てることで、しんどさを意識し、しんどさに留まってしまふことになる

患者になった人は何を考えている？

- すべてが「仕方ない」
- 発症前にどう生活していたか、体感としては思い出せない
- いまの体でやっていく（いまの体の状態に適応していく）しかない
- 自分の体は、つねに、いまの体でしかない

= 発症によって失われたものを惜しんだり悔やんだりするのは観念的なこと。

体感的・実感的なことではない

2. 障害があることを どうとらえるか

二種類の人々

事柄（何に関するのか）ごとにきまり、程度の差があって、境界は不明確だが、

A「意識しなくても頭や体を思うように動かせる」人々と

B「意識（努力）しなければ頭や体を思うように動かせない」人々

- 私の場合突然 A から B になったが、最初から最後まで A あるいは B の場合もあるし、B から A になることもあるだろう
- A と B は共約不可能 = A の時に B、B の時に A の体感は、わからない

（哲学的には「その人の体感は他の人にはわからない」のは自明の真理。わかるならば「他の人」ではないので）

医療・リハビリテーションとは

- 医療はAの人がBの人を治そう・癒やそうとする
- リハビリはAの人がBの人を、Bのまま
で生活していけるようにしようとする
- いずれも、Bの人が体感していることは
わからずにやっている。Aの人の基準・
視点で、Bの人の人生・生活に関わらざ
るを得ない

= どこまでも外部からの「ひとのこと」と
しての働きかけに留まる

意思を表明できない時の意思は 「元気な時の意思」と同じか？

- 意思はあるが表明できなくなった時の意思は、リビング・ウィルなど「元気な時の意思」と同じか？

→同じではない！

- AとBの体感は共約不可能 = Aのときに、Bになった時の体感は想像できない
- したがって、Aの時に、Bになった時の自分の意思を想像しても、まったくあてにならない

傍からは「ぼんやりしている」「意識 清明でない」と見えても

- 意識ははっきりしていて「これをしよう」「あれをしなきゃ」と思っているにもかかわらず、頭が重い・脳に負担をかけたくない・めまいがする・目がよく見えない・声を出すのがしんどい、などの理由から、目をつぶって横になっていることがある
- はたから見れば「ぼうっとしている」「ぼんやりしている」「眠っている」ように見えるが、意識そのものは清明かも
- 「思いを表現/表明しない」からといって、必ずしも「思っていない」とは限らない

「事前指示」はなぜ重んじられる？

「事前指示（アドバンス・ディレクティブ、AD。ACPによるものも含む）」は（本当に）Bになった時の意思を（おおむね）Aのときに推測するものだから、正確さは保証されない

...にもかかわらず、なぜ事前指示が重視されるのか？

：要するにそれは「周囲の人々が助かるから」であり、周囲の人々にとって便利なもの（事前指示があれば、どうしてよいかを決められる）

本人の意思はあるが表明できないのかもしれない場合にも、本人の今の意思と一致しているかどうかは、面倒なので確認されないかも

「障害がなくなる治療[薬]があったら受け[飲み]ますか？」という問いへの違和感

- そもそもが、障害のない（Aの）人が障害のある（Bの）人に対して発する問い。障害者（Bの人）自らが発する問いではない（問いの非対称性、不公平性）
- その意図は、「はい」と答えるなら「やはり障害があることはしんどいんだろう・嫌なんだろう・苦しいんだろう・逃れたいんだろう・障害をなくしたいんだろう」ととらえ、「まさに本人がそう考えるのだから、障害の中で生きることは不幸だ」といえる論拠とすることにあるのかも（誘導尋問的）

「障害がなくなる治療[薬]があったら受け[飲み]ますか？」という問いには答えてはいけない

- 障害がある（障害の中で [共に] 生きている、Bの）時に、障害がない時の（Aの）状態を、実感 [体感] を持って経験することはできない
 - 後天性障害者でさえ、障害のなかった時の体感
はわからなくなっている
- 障害がなくなった時の体感
はわからない
 - にもかかわらず、わからないことを無理に答
えさせようとしている
- こんな粗雑な問いに答えてはいけない

「障害がなくなる治療[薬]があったら受け
[飲み]ますか？」という問いの粗雑さ

- 「違う性になってみたいですか？」 「違う時代に生まれてみたいですか？」 「他の家に生まれてみたいですか？」 「他の動物になってみたいですか？」等の問いと同じように、体感[実感]を伴って答えることができない
- よく考えて発してはいない、いいかげんな、粗雑な問い
- 誠実に答えるなら、回答は「正直わからないです」か「はい。わからないので体験してみたいです」の、どちらかでしかない

中途障害の場合は？

「中途障害の場合は、一時的な病気の患者が治りたいと思うのと同様に、元の状態を体験しており、元に戻りたいのでは？」

- 「治りたい」とは「今の苦しさ・つらさ・しんどさから解放されたい」ということ
- 「元に戻りたい」というのは、発症以前はそのような苦しさ・つらさ・しんどさがなかったから。つまり「解放されたい」ということの表現にほかならない
- 元の状態はすでに体感できない「別世界にいた頃のこと」でしかない
- 今後苦しくない・つらくない・しんどくないようになることも、新しい状態である

「障害がなくなる治療[薬]があったら受け[飲み]ますか？」という問いをどう扱うか

- 「しんどいですか？」 「つらいですか？」 「苦しいですか？」 という問いには、「はい」と答えてよい
- 「楽になりたいですか？」 という問いにも、「はい」と答えてよい
- しかし、だからといって「不幸（幸せ）ですか？」 という問いには、すぐに答えてはいけない
- まず、「あなたが言う『不幸（幸せ）』って、どういうことですか？」 と反問すべき

生きていることで精一杯

- ほんとうに生命が脅かされているときは、それに対処することで精一杯
- 「しんどい」「苦しい」と思う余裕すらない
- 「しんどい」ときは「しんどい」、「苦しい」ときは「苦しい」だけ
- それを「不幸」とか考えるのは、客観視できる余裕があるから

「しんどい」「つらい」「苦しい」ならば即「不幸」か？

- 「つらい」「しんどい」「苦しい」のは、そのまま、そうであると認めてよい
- しかし「つらい」「しんどい」「苦しい」ということと、「不幸せ」とか「生きるに値しない」とか「死んだほうがまし」とかいうことは、全く次元が違う
- 「つらい」「しんどい」「苦しい」のは、単にそうであるというだけのこと。それを表現したからといって、即「不幸」ということにはならない

「生きていること全体が苦しい」？

- 「つらい」「しんどい」「苦しい」のは、具体的な特定の事柄に関してである
- その具体的な特定の事柄は生きていることの一部にすぎない
- 生きていることの中には「うれしい」「楽しい」「快い」具体的な特定の事柄も含まれている
- 生きていること全体が「つらい」「しんどい」「苦しい」というのは粗雑すぎる

「生きていること全体が不幸」？

- 生きていることの中の「つらい」「しんどい」「苦しい」事柄をマイナス、「うれしい」「楽しい」「快い」事柄をプラスと捉え、全体を差し引きをして、マイナスになったなら「生きていること全体が不幸」、プラスになったなら「生きていること全体が幸せ」と捉える発想は、粗雑すぎる

効用計算は粗雑である

- 社会に関する効用計算（→功利主義）では、ある特定の事柄（立法、政策など）に関して、関係者全員の効用を総計する
→一つの事柄に関する、様々な人々にとっての効用を比較できるのかが問題になる
- 個人に関する効用計算（→一種の利己主義）では、様々な異なる多くの事柄（人生の出来事）に関して、その個人にとっての効用を総計する
→一人の人にとっての、様々な異なる事柄に関する効用を比較できるのかが問題になる
- どちらも粗雑！

快苦/選好/意識/記憶は必ず 「その時のその主体」にとってのこと

- 快いのも苦しいのも、必ず「その時のその主体」にとってのこと。快樂や苦痛、選好の満足や不満足が、その時、そう感じている主体を離れて存在することはありえない
- にもかかわらず「その時のその主体」から離れて存在するかのようには快苦や選好を差し引きしようとするのは粗雑
- 快苦や選好ばかりでなく、意識や記憶も、そう意識し記憶している「その時のその主体」から離れて存在することはありえない

「粗雑な効用計算が必要な場面もある」

- それは認める。国や自治体の立法や政策、組織の行動、個人の人生や生活などに関する決定においては、「どんぶり勘定」として効用計算のようなものが目安として有用なことはある
- しかし、だからといって効用計算が粗雑であることに変わりはない
- 人の生死に関わる精妙な場面にまで粗雑な効用計算を適用すべきとはいえない

「つらい」「しんどい」「苦しい」には否定的な意味しかないか？

- 「つらい」「しんどい」「苦しい」ことには肯定的な意味が**含まれている**ことも
- 「修業」「修行」「鍛錬」「訓練」「トレーニング」「勉強」...
- 自発的に選択したことではないが、それでも引き受けることがある
- 引き受けることによって肯定的な意味を自発的に与えている

自発的に引き受けるなら「つらい」「しんどい」「苦しい」ことではない？

「自発的に引き受け、肯定的な意味を与えるのなら『つらい』『しんどい』『苦しい』ことではなくなっている」という言説は皮相的

- 「つらい」「しんどい」「苦しい」ことにも、マイナスの価値だけでなく、**プラスの価値が同時に含まれていることもある**
- 「つらい／しんどい／苦しいけれども楽しい／やりがいがある」等の言明は、矛盾でも無意味でもない

3. 生とは、死とは？

「生きている」のは誰か？

- 「私」「I」一人称
- 「彼／彼女／それ」「he/she/it」三人称
- 「あなた」「you」二人称

：向き合う人、顔と顔を合わせる相手。「身近な人」であり、「愛する人」「かけがえのない人」である場合もある

(参照：M.ブーバー『我と汝』)

★誰が、誰として「生きている」かによって、「生きている」(あるいは「もはや生きていない」)の意義が異なる

「彼」「彼女」「それ」とは？

- 「彼／彼女／それ」（三人称）の存在とは、「私」にとって「その人」「第三者」
- 「彼／彼女／それ」とは、「私」にとってその存在が、自分とは距離のある第三者（「他人」）であるという関係^{を表現している}
- 「彼／彼女／それ」は「私」の観察対象に^{しかならない}
- 観察するには客観化（自己意識による対象化。自己意識は自己をも対象化している）が必要
 - したがって、一人称の「私」と三人称の「彼／彼女／それ」は同時に生成する

「あなた」とは？

- 「あなた」（二人称）は、「私」と相互に「顔と顔を向き合わせる関係」にあることが多い
 - 「あなた」と呼びかけるのが私にとってででしかなく、あなたにとって私は「彼／彼女」でしかないこともありうる（例：片思い）
- 意識の働きによる原初的關係から発する
 - 自己意識が生成するまではおそらくすべての存在が未分化の状態。自己意識の生成とともに、一人称の「私」と三人称の「彼／彼女／それ」と二人称の「あなた」が同時に対象化されて成立する
- 「あなた」の存在は身体を通して知られる
 - 身体が機能している限り存在していると受け取られる（例：「脳死体」）

「私」とは？

- 「私」とは、体感を伴って「これ」と名指しされる身心の状態
- 「あれ」でも「それ」でもなく、「これ」「この」身心。体感されている身心

「私」が生きているとは？

- 「私」（一人称）の生とは、「私」という体感的な意識

（自己意識 = 意識についての意識。主に脳の働き）

- 「私」の死とは自己意識の喪失
- 自己意識が失われれば、「私」からみた、「私」にとっての世界は存在しなくなる
- 脳ができる前の胚のとき「私」はまだ生き始めておらず、「脳死状態」に陥れば「私」はもう死んでいるのかもしれない

生きていることは単なる事実

- 生きていることは「ただ生きている」こと以外の何ものでもない
- 生きていることは、ただそうであるということだけ

生きていること自体はプラスでも マイナスでもない

- 生きていること自体に、プラスの価値もマイナスの価値もない
- 生きていること自体が、それだけで、「尊い」「尊厳がある」わけでも、価値があるわけでもない
- また、生きていること自体が、それだけで、「生きるに値しない」ということもない

生きていない事態は知り得ない

- 生きていない（生まれていない、死んでいる）事態は、私たちの体験し得ない、知り得ないこと
- 死んでいることは体験しえない
 - 死んでいくこと = 死ぬこと = 生きているのが終わること、は体験できるが、他の人に伝えることはできない

生きている以外のありようがない

- 私たちは、生きている以外のありようをすることができない
- 死んでいる、生まれていない、という事態を体験することは不可能
- 生きているということの外側に出ることとはできない
- たとえ、死んでいるとか生まれていないとかいう事態を想像しても、その想像内容は真ではありえない

生きているのはなぜ「尊い」のか

- 生きていることは、ただそうであるということにすぎない
- **だが、なぜ、**生きていることは「尊い」「価値のある」ことになるのか？
- それは、私たちが生きているからであり、生きていることしか考えられないから
- 価値を付与するのは生きている**[意識ある]**主体。生きている**[意識ある]**主体が全く無ければ、世界や宇宙のどの事象にも（プラスやマイナスの）価値は一切付かない

「もの」と「こと」は異なる

- 「もの」：物質、物体
- 「こと」：「もの」の性質や働き
- 「こと」は「もの」がなければ存在しない
- 生命は「もの」ではなく「こと」である

「～である」と「～がある」は別のこと

- 同じ「ある」でも、「～である」(性質や働き)と、「～がある」(存在)はまったく別のこと
- 「～である」(性質や働き)は、その性質を持つ、ないし、そう働くものごとが存在することが前提
- 存在しないものごとについて「～である」を言うことはできない

(「実存 [存在] は本質 [性質] に先立つ」サルトル)

「～でない」と「～がない」も別のこと

- 同じ「ない」でも「～でない」(特定の性質や働き^緑の否定)と「～がない」(存在^緑の否定)も、まったく別のこと
- 「～でない」(特定の性質や働き^緑の否定)は、その性質や働き^緑をもたないものごとが存在することを前提にしている
- そのものごとが存在しなければ「～でない」を言うことはできない
- 性質や働き^緑は、そのものごとが存在していることが前提になっている

生命は身体の働きである

- 生物体（生きもの）と生命（生きていること）とは異なる
- 物質からなる生物体（「もの」）の働き（「こと」）が生命である
- 生物体（生きもの）がもはや働かなくなるほどに損なわれれば、生命という働きもなくなる（=死ぬ）
- 生物体が生命という働きを失った（もはや働かなくなった）ときが死である

魂は存在しない

- 生命は生物体の働きだから、生物体を離れて生命は存在しない
- 生物体とは別に、生命（「生氣」「魂」）があるわけではない
- 心は生命という生物体の働きの一つ。したがって、生物体を離れて心もありえないし、生物体が死ねば心もなくなる

生しか経験できない

- 意識ある生物体が経験するのが「私（一人称）としての生」である
- 生きていなければ経験はない。死ねば経験する主体が存在しなくなっている
- 死んでいることを経験することはできない
- 私たちが経験できるのは生だけ

死は知り得ない

- 死は、単に、生が存在しないこと、生きていないこと
- 生を経験しているもの（＝「私たち」すべて）にとって、自分の死は経験しようがなく、知り得ない
- 死んだときには、死んだとわからない

死とは生の不存在である

- 「死んでいる」こと（「もはや生きていない」こと）、および「生まれていない」こと（「まだ生きていない」こと）は、いずれも「生が存在しない」ということである
- 生きている「私」にとって、自分が「存在している」とは、生を経験していることにほかならない

死に方は選べない

- 生まれ方を選ぶことはできない
 - 気づいたときには「生まれている」
- 死に方も選ぶことはできない
 - 生体が死ぬのは物理的現象。本人にとっての「外力」で死ぬのであり、自身の「力」で死ぬこと（**厳密な意味での「自死」「自殺」**）はできない
 - 死にかけているときの身体の反応は、意識によって制御できない
 - 本当に死ぬときには、意識のほうが先になくなっている。死につつあることを最後まで意識していることはありえない。いわば「気づかないうちに死んだ・死んでいる」のだが、本人はもはやそのことを気づくことはない

「自殺」「自死」「自決」とは何なのか？

- 自分を死なせる「外力」（物理的な力）を自分で招くことはできる（投身、縊首、服毒...）
 - でも、死んでいく過程自体は制御できない
- できることを証明したい欲求がある
- やったらどうなるか試したい好奇心もある
- でも、やってしまったら（やり直すための主体がなくなり）やり直せない、ということをも十分に理解していない場合が多そう
- あるいは、多少理解した上で、他人に取り戻せないダメージを与え、自分が存在したことを刻印しようとすることもありそう

死んで楽になることはない

- 死（死んだこと、死んでいること）は経験できない
- 死んだときには、苦痛からの解放を経験する主体がない
- したがって「死んだほうがまし」ということはありえない
 - 「まし」であることを経験する主体がない
 - 苦痛から解放されたことも経験できない。
「解放」を経験できるのも生きているからこそ

死は眠りでも休息でもない

- 死ぬことは「眠り」でも「休息」でもありえない
- 眠っている時も、身心はさまざまなことを感じており、体感はある。自己意識が休んでいるだけ
 - 夢を見ていれば自己意識も活動している
- 死ねば、眠ったり休んだりする主体そのものがなくなる
- 死は「シャットダウン」であり、「スリープ」ではない